

■櫻井委員ヒアリング概要

日 時：平成 27 年 11 月 19 日 10：30 ～

場 所：高崎経済大学櫻井研究室内

同席者：福島県まちづくり推進課 諏江課長、上田主任主査

【櫻井委員意見内容】

私は、震災後から現在まで、浪江町の県外避難者の支援事業をコーディネートしてきた経験を踏まえ、その視点から復興祈念公園に対する意見を述べたいと思います。

浪江町における県外避難者の支援事業には、『浪江のころ通信』の発行や浪江町復興支援員の全国配置、そして全国各地での「なみえのしゃべり場」の開催などがあります。

『浪江のころ通信』とは、各地に避難している浪江町民を訪問・取材し、顔写真入りで一人ひとりの今の思いを綴るものです。私が震災から 1 ヶ月後に役場に提案をし、以来、役場との協働事業として浪江町の広報の紙面を活用して掲載してきました。震災の年（平成 23 年）の 7 月 1 日に創刊し、現在まで毎月 1 日に欠かさず発行し、現在まで約 350 件、700 名ほどの取材をしてきているものです。

復興支援員は、現在、全国 10 拠点に 30 名を配置して、福島県以外の全ての避難者宅を戸別訪問したり、各地での交流会や学習会を開催したりする取組みを平成 24 年 10 月頃から進めてきています。この復興支援員のおよそ半数は、浪江町民自らが務め、「被災者が主体となる復興」という理念を今日まで貫いてきています。私はこれら事業の統括アドバイザーという形でかかわりを持っています。こうした一連の取組みから見える町民の思いから、復興祈念公園への私なりの期待を述べたいと思います。

復興祈念公園が追悼・鎮魂の意味を持つことは当然であると思います。それを前提としながら、私はこの 4 年余り浪江町の皆さんとかかわる中で感じることは、震災前のこの地域がいかに豊かなところであったのかということです。町民の言葉から出てくる浪江町は、新鮮で豊富な食、山と海に囲まれた自然、そして地域の文化や人間関係などが本当に豊かな土地であったということなのですが、このことを復興祈念公園が伝える記憶、あるいは形として示すことはできないかということです。自分の仕事柄、各地の地域づくりを見つけていますが、浪江町は桃源郷のように豊かな土地であったと感じている。海の物も、山の物も、物々交換で口に入るような土地であったとみなさんおっしゃる。関東に避難してきた浪江町民などは、スーパーで売る魚なんてまずくて食べられないと言っている。そんな豊かな土地と人びとの営みがここにはあったということを残したい。

県外に避難した人たちは、その多くが、現在もなお、帰還への葛藤や悲しみのなかにはありますが、浪江のことを口にすると、少しずつ笑顔があふれてきます。記憶の中にある浪江町がそうさせるのだと思います。特に子どもたちは、震災以降、浪江町には帰っていま

せん。これは、『浪江のころ通信』で私が二人目に取材したある小学生の言葉ですが、「浪江小学校の校歌を忘れたくない」というタイトルの『通信』があります。

その子は、群馬県に暮らしているのですが、彼は転校先（群馬）の小学校の全校集会などで校歌を歌うときに胸が詰まるという。それは、「転校先の校歌を歌えば歌うほど、自分が帰りたいと思っている浪江町、浪江小学校の校歌を忘れてしまいそうな気がする」という意味です。その子の記憶にあるのは、楽しかった、そして豊かだった故郷の姿だけなんです。その子が大人になって、この復興祈念公園や浪江町へ行ったとき「ここは本当に良いところだったんだ」と自分の子どもにも伝えられるような、そうした豊かな土地だったということを（復興祈念公園で）示せないかと思う。（復興祈念公園の）場所は、海が見えて、後ろを向けば山も見えて、そういう土地の特性というか、山と海が両方あるという土地のロケーションを大事にして欲しい。福島県外からこの公園へ来る人にも、すごく豊かな土地だったということを伝えたい。

（復興祈念公園候補地周辺は、）原子力発電所の爆発によって危険なところといったイメージが付きまわっている。しかし、例えば、郡山市の辺りで、1月や2月に猛吹雪の時も、山を越えて浪江町まで行くと、雲ひとつ無く晴れているときがある。私は、震災後、沿岸部の請戸小学校の校舎に座って「浪江町は桃源郷だ」と言ったことがあります。とても幸せな人びとの営みがあった場所だなあと思いました。そのことを大切にしたい。

もう一つ、県外避難者の立場から言うと、宮城県、岩手県と違う特性として、あの土地に帰ってこない町民が多いという現実です。

浪江町では、「どこに住んでいても浪江町民」という復興計画の理念がある。九州に住んでいる人も、全国どこにいても浪江町民であると。これは私たちの県外避難者の支援事業の常に根幹にあります。

私が復興支援員の皆さんに言っているのは、どんなに時間がかかっても必ず全ての家を訪問しよう。門前払いを食らっても、浪江町が、役場が、あなたの家にお邪魔しましたという事実だけは残そうと。だから門前払い食らっても、二度、三度、必ず行くようにしている。みんな、顔写真入りのポストカードを入れたりなどして頑張っています。

しかしながら、一方において、（浪江町に）戻って復興に直接携わっている人たちと、戻らない人たちとの間には様々な軋轢がある。浪江町に戻らない方々に対して「町に戻らない者は町民じゃない」などという厳しい意見もお聞きしたことがあります。逆に、県外にいる方には「仲間を裏切った罪悪感を覚える」という声もある。何の罪も無い福島被災者たちが、いま置かれている現実を私たちは直視すべきだと思います。

県外避難者を支援している立場から言うと、最終的に浪江町や双葉町に帰る人と帰らない人が繋がる。心の中で繋がる。みんな町民だよな。みんな福島県民だよなって。それを形式的にはなく、心の底から繋げることが出来るまでを私たちは一つの目標にすべきと考えています。

やや抽象的な言い方になりますが、直接復興に携わる人も、県外にいる人にとっても、両方が繋がる事が出来る拠点というか、心の拠り所というか、そういう場所に（復興祈念公園が）なれないかと思う。そうした意味において県外にいる人たち、福島に戻らない人たちにとっての公園のあり方という視点を私は強調しておきたいと思います。

私は、帰還する人を増やすという発想だけでは、福島の復興はあり得ないと思っている。福島のことを想って、（福島に）こだわる人をどう増やすかということ。事実、九州で浪江の食べ物を近所の方に振る舞っている人もいる。「地元では、こういうものを作って食べるんです」と。それは、九州に居ても、福島のことにこだわり続けている証。そういう人たちを育てていくこともまた、福島の復興ではないかなと思っている。

とにかく、戻る人と戻らない人を繋いでいく。そういう拠点であって欲しいなあと思います。そういう意味からすると、先ほどの少年の言葉に戻れば、復興している姿よりも、「浪江町って、すごく良い所だった」ということが描かれていた方が、人びとは繋がる事ができるのではないかな。逆に復興している姿、記憶の中にある故郷とは異なる姿ばかり描かれると、何だか自分たちは、外されてしまったような思いになるかもしれない。福島を離れた人にとっての拠り所にもなって欲しい。福島に残る人間、復興に携わる人間と福島に戻らない人が繋がる事が出来る場所であって欲しい。それは今後の自分の課題でもあるが、復興のシンボルとしての祈念公園への期待です。

それから、技術的な問題としては、（有識者会議委員の）皆さんも指摘されているように、町民の声を祈念公園の整備に活かしていくということです。町民の声を反映していく時に、涌井先生の意見とも重なるかもしれませんが、大切なことは、今後の一連の整備プロセスの中で活かしていくということです。つまり、ここ何ヵ月間かの問題ではなく、地元住民の参加を長期的なスパンで考えて欲しいということです。今後の建設計画や具体的な公園整備においては、当然ながら段階的に充実していくと考えますので、町民の声もまた段階的に反映していく。（復興に関連する）状況が二転三転していくなかで、復興計画に描いたとおりの復興にはならないことだってある。常に公園やその周辺整備も含めて、町民の声を長期的なスパンで反映しながら整備していくぐらいの発想が必要と思う。私も宮城県内の復興計画や集団移転等にも関わっていますが、ここが宮城、岩手との違いかもしれない。計画で描いたとおりに進まないことが多い中で、常に地元住民の声を柔軟に活かす、そうした公園整備であって欲しいということです。

もう一つ、これも（有識者会議委員の）皆さん言っておりますが、周辺施設との一体性ですね。双葉・浪江の復興計画との関連性・一体性は、重視して行って欲しいということです。

以上のように、私としては県外避難者の立場から、祈念公園に対しての意見を申し上げました。「もう故郷には戻りたくない」なんて思っている人はだれもいない。「戻りたくて

も、戻れない」という被災者の想いをきちんと受け止めた公園であって欲しいのです。

特に、次世代を意識した時に、子どもたちは今も帰ることができずにいるため、震災直前の記憶の中にあるものが故郷です。その記憶が想起されるような公園であってほしい。その子たちが40歳ぐらいになったとき、復興祈念公園に立ち寄って「ここはこんな故郷だった」とか、「お父さんお母さんたちは、逃げたくて逃げたんじゃない」「故郷を捨てたのではない」と自分の子どもたちに語ってあげられる、そんな会話がされることを想定したい。

先ほどの『浪江のこころ通信』をつくるときに、私が役場や関係者に配布した企画書に「故郷への帰還を目指して」と当初は目標の一つとして書いていました。しかし、3ヶ月ぐらい後に修正しました。「『町へのこだわりを育む。』それが浪江のこころ通信です」と。私自身、誤解していたわけです。震災直後は「帰還を目指す」と考えたわけですが、その発想は間違っていたんだと。県外避難者からの話を聞きながら、避難先の土地に残らざるを得ない。戻りたくても戻れない人たちが圧倒的に多いんだと。それでも浪江のことを涙しながら、熱く語る姿から、やっぱり故郷のことを愛し続けてもらうことを大事にしなければならぬんだとすぐに切り替えました。現実、今4年経って思えば、そういう人の方が多いいぐらいです。故郷を嫌いになったとか、故郷のことを悪く思っている町民は一人もいないと役場職員の皆さんともよく話すことがあります。役場職員も町民から厳しい指摘を受けることで、色々な意味で辛い、苦しい心情になるときがある、そんなときに「町のこと悪くしようと思って、役場に言いに来る町民がいるだろうか。福島を何とかしたい。町を何とかしたいと思うから言いに来るのであって、それは役場、行政職員としてはむしろ有り難いことだと思う必要があるのでは」と。先日も涙しながらある職員と話しました。そうした（浪江町や福島県への）こだわりがあって指摘してくれる、来てくれる人たちを少しでも持続的に残していかなければならない。育んでいかなければならない。もう福島なんてどうでもいいとか、言ってもしょうが無いというふうにならないように。だから、そうした（浪江町や福島県への）こだわりを持ってくれているのは有り難いし、そうしたこだわりをむしろもっともっと育まなければならぬ。そんな風に（復興祈念公園が）多くの人びとを繋ぐ、結びつけるような拠点であって欲しいということです。

以 上